

聴覚の違いは目で見える事ができません

そのため本人が違いを理解するにも、周囲の人に理解してもらうにも、大変な努力が必要です

聴覚ケア

聴覚過敏の緩和 子どもから大人まで聴覚過敏を訴える方が増えています。原因は様々ですが、聴覚を調べると骨導音(骨振動で聴く音)が気導音(空気振動で聴く音)を上回っている場合が多く見られます。トマティスメソッドは、音を聴く事が恐怖と繋がっている身体と心に、ゆっくりしっかりと呼吸と、骨振動を伴う発声と、正しく機能する聴き方をじっくりと染み込ませ、過敏の緩和を目指します。

老人性難聴予防 加齢に伴う変化の中でも聴覚の劣化は想像以上に大きな影響があります。中耳の鼓膜張筋とアブミ骨筋は緩んで音に集中しづらくなります。特に、高音の聴き取りを調節する部分が先に緩むので、会話の高い音(特に子音)は聴き取りづらく、耳からのエネルギー入力も不足します。特に初期は、会話がうまくいかなくなり、孤立感を覚えたり短気になったりしがちです。トマティスメソッドはこの中耳の筋肉をトレーニングすることで機能をケアするとともに耳のアンチエイジングを助けます。

聴覚ストレス解消 音、声にまつわるトラウマは悲しいくらいしつこく耳と心に残ります。トマティスメソッドは新しい聴こえの回路を開いてトラウマから気持ちを切り離し、発声を強化して恐怖感を低減し、健全な聴覚を取り戻すお手伝いをします。

発達しょうがいケア

学習困難対処 連動、協調運動 学習困難の子どもと大人の多くは、「聞こえる」耳は持っていますが「聴く」耳を持っていません。音の高低差の判別が苦手、音が急に現れるとキャッチできない、音の情報が一定量以上になると理解を超えてしまう、聴き取りづらい音があるなど、まるで耳にカーテンがかかっているような状態です。この状態の耳では、声は聞こえるけれど音の輪郭はハッキリせず、聴き取りや意味を理解するのに強い困難を感じてしまいます。また、右利きの方が利き耳を左にすると、脳の言語中枢に音声を送達する情報処理が遅くなるため、授業について行くのが大変だったり、先生の声と教科書の文字を同時に追いかけられなくなったり。結果として注意力散漫、集中力、記憶力に欠け、学習、会話に支障あり、と判断される場合もあります。トマティスメソッドは、耳からの音声入力の分析・選別の力をつけ、耳、目、身体が同調するように中耳の筋肉を訓練し、「聞こえている耳」に「聴く」ことを学ばせます。利き耳も右に強化し、迅速な聴覚理解を身につけるお手伝いをします。

心理ケア

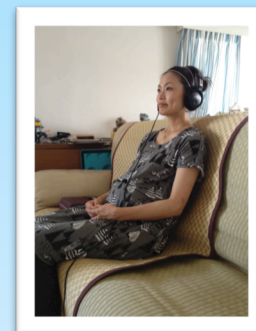
心因性難聴の予防 耳の器質的な問題はないのになぜか聴力が落ちる、聴き取りを拒否するあまり心理的な難聴を起こしている、そんな方もいらっしゃいます。音をシャットアウトし続けていると中耳の筋肉は正しく機能しなくなり、聴く力が落ちます。聴覚細胞はいったん破壊されたらなかなか再生しませんし、周辺へと聴覚の劣化が広がる事もあります。トマティスメソッドはまず心身をリラックスさせ、ストレスを取り、中耳の健全な機能を回復させるトレーニングです。

うつ傾向予防 過労、うつ傾向から来る活力不足は、聴覚、声、姿勢にも影響します。耳は脳が円滑に機能するために必要な活動エネルギーの90%を供給しています。トマティスメソッドで身体の機能や脳の環境を改善しましょう。聴覚のバランスを整えて心理的な認識をリニューアルし、自己の明瞭さを取り戻します。

声を出す 聴こえが空気の振動と骨の振動の統合であるように、発声も空気の振動と骨の振動の統合です。けれど多くの人は自分の身体が楽器であることを忘れてしています。全身をしっかりと緩ませ、呼吸を整え身体中に響かせて声を出すことは、自分の気持ちと身体の出会であり、安心感、心身のバランスへと繋がります。

言葉の出にくさは、上手く聴こえていないためかもしれません。大きな声を出そうとすると、力が入って逆にに出にくく届きにくくなっている場合もあります。音を出す時の喉や口の中の筋肉が上手く連動していないかもしれません。自分の声を正しく聴き、キャッチしにくい音を正確に脳に伝え、正しく出す練習をします。

マタニティ 受胎後4ヶ月で聴覚神経は完成します。大切な赤ちゃんと一体である時期からコミュニケーションを取っておけば、産まれて来たあとも親密で良好です。人が人として生きて行く上で大切な「愛着」が高く、言語と周囲の世界に対する「興味」の強い子供が、マタニティを受けられたお母さん方からは産まれて来ます。妊娠8ヶ月以降の、リラクゼーションと発声を取り混ぜたワクワクするトレーニングです。



聴覚・心理・発声、
これらは人の身体の中で常に連動しています